神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

On The JinPingMei Cihua (2)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 晴彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/529

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

『金瓶梅詞話』をめぐって（その二）

佐　藤　晴　彦

はじめに

筆者は先に「『金瓶梅詞話』をめぐって」と題する文を草した（以下，「前稿」と呼ぶ）[(1)]。ただ前稿の「はじめに」でも述べたように，執筆当初は『金瓶梅詞話』（以下『詞話』と呼ぶ）全体の６割強にあたる61回分しか調査できておらず，100回分すべて調査できたわけではなかったので，その点が気がかりであった。その後残り39回分の調査が終わったこと，また前稿を執筆した時には十分検討できなかったテキストも確認できたこと，さらには前稿執筆時には失念していたことを思い出したこともあるので，前稿を受け，「その二」を執筆することとした。

1 『金瓶梅詞話』の影印本

『金瓶梅詞話』の影印本は大きく日本と中国で出版されたものに分けることができ，日本の影印本は大安が1963年に出版しており，中国では1933年に古佚小説刊行会が出版している。それ以降数種の影印本が出版されているが，すべてこの古佚小説刊行会系統のものと言ってよい。これらの影印本については，若干問題はあるものの，楊鴻儒2007で比較的要領よく述べられているので，以下に引用したい[(2)]。ただ関連個所のみ引用するため，楊著の番号と本稿の番号は異なるのでご注意願いたい。

1.1　楊儒鴻2007の紹介

(1) 北平图书馆藏词话本

≪新刻金瓶梅词话≫藏本之一。此本于1931年冬，北平琉璃厂古书铺文友堂的太原分号在山西介休县购得，后以二千银元售给北平图书馆，抗日战争期间寄存于美国国会图书馆，1975年归还给台湾博物院。古佚小说刊行会影印本即据此本影印。

(2) 慈眼堂藏本

≪新刻金瓶梅词话≫藏本之一。藏于日本日光山轮王寺慈眼堂。与北平图书馆藏本同版，唯装订成十六册，1941年丰田穰氏于≪某山法库观书录≫首先披露。1963年与栖息堂本一由日本大安株式会社合成一部而加以影印，世称“大安本”。

(3) 古佚小说刊行会影印本

≪新刻金瓶梅词话≫影印本之一。1931年山西发现的≪新刻金瓶梅词话≫由北平图书馆入藏后，于1933年 2 月，由北大教授、孔德学校图书馆主任马廉集资影印（缩印）了一百零四部，第五十二回缺页由“崇祯本”抄配；又附印通州王氏收藏“崇祯本”插图一百页二百幅，订成一册，全书装成两函二十一册公之于世，有力地促进了对≪金瓶梅≫之研究。

(4) 文学古籍刊行社影印本

≪新刻金瓶梅词话≫影印本之一。1957年文学古籍刊行社以古佚小说刊行会影印本为底本，重印了一千部，遂使广大研究者得睹词话本的基本面貌，实有功于世。然本本影印时，错误较多，在一定程度上失却了词话本的真实性。

(5) 联经本

≪新刻金瓶梅词话≫影印本之一。1978年 4 月台湾联经出版事业公司影印出版。该本的特点是据台湾故宫博物院原刻本一一还原，与原本一样大小，朱笔圈改处及印章均用红色套印，便于辨认，是目前最为接近原本风貌的一种印本。

(6) 太平本

≪新刻金瓶梅词话≫影印本之一，全称为≪全本＜金瓶梅＞词话≫。1982

年 8 月由香港太平书局影印出版．全书共六册。据太平书局影印出版编辑部在“出版说明”中说：本书是根据1933年以“古佚小说刊行会”名义影印的≪金瓶梅词话≫为底本重印的，实际上该本是据文学古籍刊行社影印本的一个翻印本。但对原书之显著错误和版面上的墨点等，做了一些修改的工作。

以上が楊鴻儒2007で触れられているうち，小論に関係する箇所である。以下，(1)北京本，(2)大安本，(3)古佚本，(4)古籍本，(5)聯經本，(6)太平本と略称することにしたい。

1. 2　太田辰夫1963の論考

ところで北京本及びその影印本には相当の書き込みがあるが，その書き込みの問題をかなり早い時期に取り上げられた論考として太田辰夫1963があるので，次にそれを紹介することにしたい。[(3)]

> 「≪金瓶梅词话≫の影印本としては，これまで，北京図書館蔵本を古佚小説刊行会が民国22年３月に影印出版したもの，及びこれを某書店が更に覆印したものがあるにとどまる。ところで古佚小説刊行会影印本と，某書店覆本との区別はどこでわかるかというに，後者にそれが前者の覆印であるという断りがきがあるわけでもなく，まったく見分けがつかない。ただ北京図書館蔵本では第52回 7，8 葉が欠けているため，古佚小説刊行会影印本ではそこに罫のみひいた白紙をいれているのに反し某書店覆本では，この部分を他本によって補写している（ただし字数が違うからうまく接続せず，三字分が脱落している)。両者の実質上の差はこれのみにとどまり，他は，印刷の鮮明不鮮明などは除き，大きな差異はないものと思われる。標題で北京影印本としたのはこの両者を指すが，筆者の蔵本は後者であるから，厳密にいえば後者を指すものと理解されたい。」

太田先生はここで「某書店が更に覆印したもの」とのみ述べられている。そこで，この影印本を楊鴻儒2007にあてはめると，古佚本の次には古籍本しか

ない。もし古籍本を指しているなら「文学古籍刊行社」と言えばすむことであって，なぜわざわざ「某書店」と言われているのか，筆者にはどうしても納得がいかなかった。しかし，飯田吉郎1963の次の記述により，どうも古籍本ではないらしいということが分かった。[(4)]

> 「“金瓶梅”を研究するばあい，現在のところ最も古く，かつ原姿に最も近いとされているテキストは，北京図書館蔵本の「新刻金瓶梅詞話」（明・万暦丁巳の序）であり，実際はその影印本（北京古佚小説刊行会，1933，3）又はその影印本，つまり影影印本（日本で出版されたという）が使用されているわけである（発行部数については，影印本が100部，影影印本が300部といわれる）。［中略―佐藤］また，昨年入荷したテキストで，同じく北京図書館本を影印したという澳門・儒雅堂本（先にのべた影印本と比較すると，“書き入れ”に異同があるが，ここではふれない）は，第52回の欠葉を明・崇貞本によって抄補している。」

この指摘によれば，古佚本と古籍本の間に少なくとも日本で出版された（らしい）ものと「澳門・儒雅堂」から出版された二種の影印本が存在したことになる。そして太田先生は問題の52回 7，8 葉の欠葉部分を「他本によって補写している」と述べられ，飯田氏は「澳門・儒雅堂本は第52回の欠葉を明・崇貞本によって抄補している」と述べておられるところから推して，太田先生が言われる「某書店」とは，「澳門・儒雅堂」を指しておられるのではないかと思われる。いずれにしても，この二種の影印本が楊鴻儒2007で抜け落ちているわけであるが，あるいは中国であまり知られていなかったのかも知れない。

1.3　北京影印本の書き入れは三種ある!?

それはさておき，こと北京影印本の書き入れの問題で，これまで言及されてこなかった一番重要なことは何かといえば，書き入れは決して一種ではなく，異なる段階で少なくとも三度行われ，書き入れは三種あるということで

ある。むろんそれはどの段階の影印かにもよるが，筆者が言う「書き入れ三種」とは，1）原書に朱で書き入れられたもの，2）古佚本出版時に書き入れられたもの，3）古籍本出版時に書き入れられたもの，の三種である。以下，影印本それぞれに則して検討してみよう。

表１　大安本，古佚本，古籍本，聯經本の出入り

該当箇所	(2) 大安本	(3) 古佚本	(4) 古籍本	(5) 聯經本
1) 14.4.b.9	問你家財下落	“則”に改竄	“則”に改竄	“則”に改竄
2) 14.8.b.11	金蓮那裡肯受	“肯”に似た字	“肯”と読める	“肯”に似た字
3) 14.11.a.1	粧花膝褲	“粧”に改竄	“粧”に改竄	“粧”に改竄
4) 14.11.a.3	玉樓在席上	“王”に改竄	“王”に改竄	“王”に改竄
5) 15.6.b.5	只在那裡門走	閑(墨で木を挿入)	閑(墨で木を挿入)	閑(墨で木を挿入)
6) 16.7.a.9	你還間聲大姐去	間(墨で一を挿入)	間(墨で一を挿入)	間(墨で一を挿入)
7) 16.10.b.11	只求各自死	“目”に改竄	“目”に改竄	“目”に改竄
8) 18.5.b.1	到踏門招進來	倒(墨で“亻”を挿入)	倒(墨で“亻”を挿入)	倒(墨で“亻”を挿入)
9) 18.8.a.8	無所不曉	“暟”に改竄	曉に近い	“暟”に改竄
10) 18.9.b.7	夜子有些餘熱	裡(墨で書きかえ)	“子”に戻す	裡(朱で書きかえ)
11) 18.10.a.1	就捆捉死了	混(“扌”に“氵”を加える)	混(“扌”に“氵”を加える)	混(“扌”に“氵”を加える)
12) 18.11.b.5	抖搜查着精神	青(上に点が２つ)	青(上に点が２つ)	青(上に点が２つ)
13) 19.7.b.7	走來譀詐我	譀(言偏を改竄)	譀(元に戻す)	譀(言偏を改竄)
14) 19.7.b.8	鼻子打歪在半邊	半(上に一を加筆)	半(元に戻す)	半(上に一を加筆)
15) 19.8.a.9	倒栽入洋溝裡	裡(示偏の点なし)	裡(示偏の点あり)	裡(示偏の点なし)
16) 19.10.a.4	自行耍錢去了	“要”に改竄	“要”に改竄	“要”に改竄
17) 19.13.b.11	那淫婦裝死兒	栞に似る	栞に似る	栞に似る
18) 21.2.a7	不賢畏的淫婦	艮(墨で書きかえ)	艮(墨で書きかえ)	良(朱で書きかえ)
19) 22.1.b.5	縣里和縣丞説	“礻”を加筆	“礻”を加筆	“礻”を加筆
20) 25.2.b.9	玉笄和惠蓮兩個	下に “一”を加筆	下に “一”を加筆	下に “一”を加筆
21) 26.9.a.5	是個没底人	“入”に改竄	“入”に改竄	“入”に改竄
22) 33.2.b.5	同來保領本錢	“木”に作る	“本”にもどす	“木”に作る
23) 35.1.b.7	本當都送問	“都”に作る	“都”に作る	“都”に作る
24) 35.11.b.2	打背梁脊下過	“春”に似る	“春”に似る	“春”に似る
25) 38.11.a.1	忽聽這邊房里	“迫”に作る	“這”にもどす	“迫”に作る
26) 39.10.a1	放了兩張卓	下に “一”を加筆	下に “一”を加筆	下に “一”を加筆
27) 39.10.b.7	預備了一張大挿	“子”に改竄	“子”に改竄	“子”に改竄
28) 39.11.b.7	觀音寺背後	“昔”に改竄	“昔”に改竄	“昔”に改竄
29) 40.6.a.2	這六姐成精死了	“六”の上に“五”	“六”の上に“五”	“六”を消し横に“五”
30) 46.11.b.8	與他並肩相挨	“有”に改竄	“有”に改竄	“有”に改竄
31) 47.4.a.1	却是楊州苗員外	“卻”に改竄	“卻” に改竄	“卻” に改竄
32) 49.1.a.11	入衙門里理事	“礻”を加筆	“礻”を加筆	“礻”を加筆

1.3.1　北京本

影印本にどれだけの手が加わっているかを理解しやすくするため，影印本三種の出入りを一覧表にしてみよう（p.５。通し番号の後の数字は巻数，葉数，表裏，行数を示す)。但し，前稿で扱った部分は除外する。

手が加わったところの例を逐一挙げるときりがないので，全てをあげるのはやめておくが，要するに一般に「影印本」という言葉で思い浮かべるテキストとは想像できないような，信じられないほどの手の加わり方である。

ところで，影印本のこうした修正を注意して見ていくと，ある傾向があることに気がつく。それはこれらの修正が，Ａ，Ｂ二種に分けることができるということである。

Ａ類は，話しの展開上で理にかなった修正であるもの。表の番号では，5)，8)，10)，11)，19)，32）などがそれに含まれる[(5)]。ところがそうしたものがある一方で，話の展開とは全く関係ないのはむろんのこと，「第一こんな漢字あるわけないだろう」というような，全く話にもならない修正Ｂ類が存在している。上に挙げたＡ類以外，ほとんどこの部類に入る。問題は，「では，なぜ性格が全く異なるＡ，Ｂ二種類の修正が行われたのか」である。

Ａ類の筆跡は肉太で，筆で書かれている。残念ながら古佚，古籍ともに墨(黒色)で復元したため，Ｂ類とやや区別しにくくなっているが，聯經はおおむね朱で復元しているため他の修正と区別しやすくなっている。このＡ類というのが原本に書きこまれたものである。この書き込みについて，古籍本の“出版説明”で次のように指摘している。

> “原書有一些塗抹之處，並不完全正確，北京圖書館收藏此書時就是如此；也不知是何人的筆墨。”

“出版説明”で指摘しているように，この書き込みが“何人的筆墨”かは分からない。前稿では，

> 「またこの朱を誰が入れたのかを明らかにするのは不可能かも知れないが，何時といつという点はある程度明らかにできる可能性があるので，

この点も検討されるべきであろう。」[6]

と述べ，問題解決を保留しておいたが，その後，何時書き込まれたのかについては，ある程度推定可能だと考えるようになったので，ここで報告したい。

ここで有用なのは，方位詞“li”と「机」の意味の“zhuo”の異体字である。

1.3.1.1 方位詞“li”

A類の書き込みが何時なされたのか理解しやすくするため，元末，明初中期の方位詞“li”の使用頻度を一覧にすると，次のようになる。[7]

表2 元末，明初中期方位词“li”的使用频率

	裏	里	裡1	裡2
1 太平樂府（至正11年［1351］）	87	123	4	0
2 大誥武臣（洪武21年［1388］）	40	0	0	0
3 辰鈎月（永樂 2年［1404］）	12	10	0	0
4 義勇辭金（〃 14年［1416］）	10	8	0	0
5 降獅子（〃 14年［1416］）	5	5	0	0
6 蟠桃會（宣德 4年［1429］）	4	0	0	0
7 八仙慶壽（〃 7年［1432］）	14	2	0	0
8 常椿壽（〃 8年［1433］）	5	13	0	0
9 復落娼（〃 8年［1433］）	26	4	0	0
10 十長生（〃 9年［1434］）	4	3	0	0
11 神仙會（〃 10年［1435］）	6	3	0	0
12 嬌紅記（〃 10年［1435］）	55	174	0	0
13 薛仁貴（成化 7年［1471］）	25	1	0	0
14 石郎駙馬（〃 7年［1471］）	13	30	0	0
15 歪烏盆（〃 8年［1472］）	10	3	0	0
16 朱子語類（〃 9年［1473］）	（ ?	?	2	4 ）
17 開宗義（〃 13年［1477］）	12	2	0	0
18 出身傳（〃 ?年［ ? ］）	1	9	0	0
19 陳州糶米（〃 ?年［ ? ］）	14	1	0	0
20 認母傳（〃 ?年［ ? ］）	5	31	0	0
21 曹國舅（〃 ?年［ ? ］）	15	19	0	0
22 張文貴（〃 ?年［ ? ］）	5	0	0	0
23 白虎精（〃 ?年［ ? ］）	5	1	0	0
24 看燈傳（〃 ?年［ ? ］）	8	29	0	0
25 孫文儀（〃 ?年［ ? ］）	1	22	0	0
26 孝義傳（〃 ?年［ ? ］）	1	0	0	0
27 白兔記（〃 ?年［ ? ］）	49	90	0	0
28 西廂記（弘治11年［1498］）	11	157	0	0
29 琵琶記（嘉靖27年［1548］）	49	148	57	1(1)
30 寶劍記（〃 28年［1549］）	11	88	24	0
31 古董解元（〃 36年［1557］）	51	0	79	0
32 十段錦（〃 37年［1558］）	212	8	8	4
33 古名家本（萬曆17年［1589］）	4	332	47	0

表２の“裡１”“裡２”とは，それぞれ“裡”“裡”を指しているが，**表２**から，“裡１”は嘉靖27年の『琵琶記』ころから普及し始めたが，“裡２”はまだそのころには普及しておらず，嘉靖37年の『十段錦』でも４個しか使われていないところを見れば，恐らく“裡２”の普及は萬暦以降になるのであろう。ところで北京本の書き込みはと言えば，**表１**の19)，32)から分かるように，方位詞“里”に偏を加える時，衣偏ではなく示偏なのである。また偏を加えるのではなく，新たに方位詞の“li”を加える場合でも“裡２”ではなく“裡１”なのである。つまり，この書き込みを行った人物の時代は，“裡２”ではなく“裡１”が優勢な時期であったということになる。ただ，残念ながら，この“裡１”はかなり後まで使われ，清代の末期くらいまで使われていたので，“裡１”だけを根拠として書き込み時期を断定できないうらみがあり，“裡１”からは「詞話が出版された萬暦丁巳以降に書き込みが行われた」ということしか言えない。次に“zhuo”について見てみよう。

1. 3. 1. 2 “zhuo”（“卓”と“桌”）

“zhuo”の表記について言えば，『詞話』の本文は，ほぼ“卓”で統一されている。

（1）把酒菜擺在卓上，…（20.3.a.10）[8]

（2）一面令左右放卓兒，…（29.5.a.6）

“桌”は極一部しか使われておらず，筆者の調査に遺漏がなければ，“桌”は次の２例しかない。

（3）那春梅一手挾着桌頭，…（34.14.b.7）

（4）…，二十張桌圍，八十股官香，…（77.3.b.11）

ところが興味あることに，『詞話』本であれだけ使われていた“卓”であったにも関わらず，崇禎本になると，“桌”に改めるか“棹”に改めるか，あるいはその前後を含めて削除するかであり，“卓”で残されるのは極めて少数になっていくのである。

ここでこの“卓”から“桌”への移り変わりについて考えてみたい。“卓”から“桌”に変化していく過程で，“桌”と“棹”の２つの異体字が現れていることは興味深い。それは一つの文字が次の形態に変化する時，１対１で変化するのではなく，１対２，あるいは１対３で変化していくことが多いということが，この場合でも当てはまるからである。つまり，当時の人の意識として，“卓”は「卓越」の“卓”であると同時に「机」の“卓”でもあった。そこで両者を区別したいという意識が芽生え，「机」の材料として代表的な“木”を偏として付した文字を考案したのである。それが“桌”であり［棹］であった。この場合の［棹］は，「舟の櫂，舟を漕ぐ」といった以前からある“棹”ではなく，“卓”に木偏を付けた文字［棹］なのである。ともかく何らかの偏を付け，元の“卓”と差別化を図りたかったわけである。ところが，新たにできた［棹］は，以前から存在している“棹”と形態的に同じとなり，区別できない。そこで折角考案した［棹］であったが，“棹”とバッテングするため淘汰されてしまい，“桌”が新たな文字として市民権を得たのである。

さて本題にもどろう。今，試みに第20回から49回までの30回分を例に挙げてみると，詞話本で146個使われていた“卓”が，崇禎本では，

“桌”に改訂[(9)]：110個　“棹”に改訂：４個　ママ：９個　削除：23個

となる。萬暦本で使われていた146個の“卓”のほぼ7.5割が，崇禎本で“桌”に変えられていることになる。このことは何を意味しているかと言えば，『詞話』本が出版された萬暦期では“卓”が最も普遍的な表記であったが，同時に“桌”も使われ始めていた。ところが崇禎本が出版された時期では，“桌”が“卓”に取って替わり，最も普遍的なのは“桌”になっていたのである。

ところで，北京本の書き換え部分を見ると，２か所，“桌”が使われている所がある。

(5) 我的兒，你做下，藥在車上磁盒兒内，…(72.18.b.9：“車”を“桌”に書き換え)

(6) 琴童安放車兒綿裀，…(76.1.a.11：“車”を“桌”に書き換え)

この書き換えは何を意味しているのであろうか。それはこの書き換えが行われた時期が，“卓”から“桌”に入れ換わりが完成した崇禎期にあったことを物語っているのである。

以上，“裡１”と“桌”の書き換えから考え，書き換えが行われた時期は萬曆から崇禎期，言いかえれば，詞話本が出版された萬曆丁巳の後ほどなく書き加えが行われたのであろうと思われる。この書き加えを確認するにはやはり聯經本が便利であり，古佚本，古籍本では墨で復元されているため，やや困難をともなう。

太田辰夫1963では

「概していえば，これらの書きいれは思いつき程度のもので，完全なものではない。」

と，いかにも太田先生らしい手厳しい指摘をしておられる。確かにその通りで，書きいれは非常に恣意的である。もしその書きいれが「『金瓶梅詞話』を「校勘」する」という立場で書きこんだというのであれば，「思いつき程度のもので，完全なものではない」という批判も当たっているだろうが，この書きいれをした人物は，なにも『金瓶梅詞話』を「校勘」しようとしたわけではなく，単に読書のすさびに気づいたことを書き込んだだけであれば，そこまで厳密性を求めるのは些か酷というものであろう。

1.3.2　慈眼堂本

略

1.3.3　古佚本

古佚本出版の際，相当の書き込みが行われた。しかも，その書き込みたるや，凡そ漢字を知っているとは思えないような書き込みである。**表１**の 1)，2)，3)，6)，7)，9) など，凡そ話しの展開など理解しているとは思えない

書き換えである。しかも，それは恐らく悪意からではなく，単に「原本がかすれていて見えにくいため，より鮮明にしよう」，という善意から出た書き換えではなかったかと思われる。ただ，残念ながら字を知らなかった。それは恐らく，古佚小説刊行会のお歴々の意思とは関係ない出版の現場で行われたのではないかと想像される。専門家がこういう馬鹿げた修正をするとは信じられないからである。

古佚本については，もう一つ言及しておかねばならないことがある。それは楊著が，

“第五十二回缺页由“崇祯本”抄配”

としている点。これは楊氏の誤解で，上に引用した太田辰夫1963で，

「ただ北京図書館蔵本では第52回 7，8 葉が欠けているため，古佚小説刊行会影印本ではそこに罫のみひいた白紙をいれている」(10)

と指摘されている通り，古佚本は52回の欠葉部分は罫線を引いた白紙で補っているだけである。

1.3.4　古籍本

古籍本も基本的に古佚本を踏襲しているが，それでも古佚本で「改悪」された箇所を極力改めようとする態度が見て取れる。**表１**の 9)，10)，13)，14)，22)，25）などがそれである。楊著では古籍本を評して，

“然本本影印时，错误较多，在一定程度上失却了词话本的真实性。”

としているが，“错误较多”というのは，古佚本ですでに始まっていたことであり，それを古籍本の責任と断じるのは些か酷と言うべきで，古籍本はたとえ一部だとはいっても，古佚本の誤りを訂正しようとする意識が見て取れ，その点はむしろ評価すべきであろう。

但し，古籍本で注意しなければならないのは，北京本の朱による書き込みの「、」の部分を相当数，「。」に改めた点である。しかも黒色で句点を加えたものであるから，原本に初めから印刷されていた句点なのか，古籍本影印

の時に加えられたのか，全く区別できなくなってしまった。この点は古籍本最大の欠点で，これを以って，

“在一定程度上失却了词话本的真实性”

と言うのであれば，それはその通りでる。

1.3.5　聯經本

聯經本について，楊著は次のように指摘している。

“朱笔改处及印章均用红色套印，便于辨认”

また，聯經本の“出版説明”の八でも，

“聯經版已據故宫博物院珍藏原刻本一一還原，以朱色印出，當更便於辨認研究，是聯經版的最大特色。”

と高らかに謳っている。確かに，元来朱で書きこまれていたのを，古佚本や古籍本のように，墨(黒色)で復元するのではなく，そのまま朱で復元したのは大いなる功績だといえるが，ただ“一一還原”というのは相当割り引いて理解する必要がありそうで，残念ながら，相当数，古佚本，古籍本と同じく墨（黒色）で復元されているのも事実である。

例えば，第49回の冒頭に，

（7）到次日依舊衙門里理事，不在話下。(49.1.a.11)

という件があるが，この“里”に聯經本は「示す偏」が付されているが，それは墨（黒色）になっている。古佚本，古籍本ともに同じく墨で「示す偏」が付されている。これがもし影印本出版段階での書き込みであれば，「示す偏」ではなく，「衣偏」になっていたであろうから，これは原本に書きこまれていたものであることは疑いない。従って，ここは当然朱で起こすべきである。この箇所だけに止まらず，墨のまま起こされた箇所は多く，すべて統計をとったわけではないので断定はできないが，筆者の印象では３割から４割，墨で起こされている。しかし，影印本出版時に改竄された部分と，原本にある書き込みとは，筆跡と筆記用具が異なるので，注意して見れば，判別

はできる。

ただ，聯經本が“一一還原”と高らかに謳っているのは決して故なしとしない。例えば太田辰夫1963で，

「原字の上に肉太な字を重ねることは，たといそれが正しくても，原則的にゆるされるべきでなかろう」(10)

という書きこみの例として，

「１回11葉表２行目「盹」，３回３葉裏４行目「去」，６回１葉表６行目「有」など。」

を挙げられておられる。古佚本，古籍本では太田先生の指摘通りになっているが，聯經本では，

「盹」：原本の「酣」に戻し，その横に朱で「盹」を書き込む

「去」：原本の「去」に戻し，その横に朱で「去」を書き込む

「有」：原本の「一」に戻し，その横に朱で「有」を書き込む

のように，非常に面倒な処理を行っている。こうした工夫を称して“一一還原”と言うならば，正にその通りであって，看板に偽りはない。

1.3.6　太平本

太平本は入手したばかりで十分な検討ができていないが，

(1) 古籍本の“出版説明”と太平本の“出版説明”がほとんど同じであること，

(2) **表１**で示した古佚本と古籍本の異同―古佚本の修正箇所を古籍本が元にもどしている箇所―を太平本で確認すると，すべて古籍本と一致すること，

の二点から推して，太平本は恐らく古籍本の複製と見なして大過ないであろう。

楊著は

“据太平书局影印出版编辑部在“出版说明”中说：本书是根据1933年以“古佚小说刊行会”名义影印的≪金瓶梅词话≫为底本重印的，实际上该

本是据文学古籍刊行社影印本的一个翻印本。”

と指摘するが，太平本が古籍本を影印し，尚且つ“出版説明”も古籍本のそれを若干修正しただけのものであれば当然起こり得る矛盾で，楊著が

“实际上该本是据文学古籍刊行社影印本的一个翻印本”

とするのは全く正しい。ただ，その後で

“但对原书之显著错误和版面上的墨点等，做了一些修改的工作。”

と指摘するのは，恐らく楊著の誤解ではなかろうか。太平本は単に古籍本を複製しただけで，手を加えるような面倒なことはしていないであろう。手を加えたのは，古籍本である。

以上，『詞話』の影印本について検討してきた。以上からも分かるように，「影印本」という概念を巡っては，どうも日中間で認識にずれがあるようだ。われわれの常識からすれば，「影印本」というのは文字通り，「写真を撮り，それを印刷する」という意味で考えている。そこには他の要素が入る余地はないと考えるのが一般的傾向であろう。ところが中国で出版される影印本というのはどうもそうではない。「影印する原本が不鮮明であれば，それを鮮明にして出版すること，それがサービスであり，それが当たり前」という考えがあるらしい。従って不鮮明であれば平気で手を加える。それが親切であり，好意でさえあるという認識のようである。平気で手を加えることに違和感を覚えるわれわれの感覚が，恐らく理解できないのではないかと思われる。要するに「影印本」の考え方をめぐって，どうも日中間に根本的な認識の差が存しているようだ。

それはともかくとして，『詞話』の影印本に限って言えば，最も信頼できるのは大安本であり，中国（台湾も含め）で出版されたものは，いずれも修正されたところがあるため，常に大安本と比較して扱うべきであろう。中でも聯經本は，原本に朱で書きこまれた部分を基本的に朱で起こしているため，「見やすい」という点で利用しやすいと言える。

以上でテキストの検討は終え，次に異体字の問題を取り上げることにしたい。小論で取り上げる文字表記も前稿と同じ“jiao”，“genqian”，“li”，“ge”である。

2. 文字表記

2.1 “jiao”について

前稿**表２**の「詞話本における“jiao”の使用頻度」に，今回調査した“jiao”の使用頻度を加えると，**表３**のようになる。

表３　詞話本における"jiao”の使用頻度

	交	教	叫
1回 ～ 9回	36	25	0
10回 ～ 19回	2	113	22
20回 ～ 29回	2	208	11
30回 ～ 39回	6	213	11
40回 ～ 49回	17	136	15
50回 ～ 59回	110	86	32
70回 ～ 79回	12	255	19
80回 ～ 89回	17	105	6
90回 ～100回	22	118	13
計	224	1259	129

表３からも，前稿で指摘した50回～59回の使用頻度の異常性が覗われる。“交”合計224個のうち，その半数が集中しているわけである。中には，“叫”を誤刻して“交”とした例もあるようだが，数としては多くないので，やはり50回～59回，就中，50回～52回に96個集中している原因が何かということは，課題として残る。

2.2 “根前”から“跟前”へ

前稿の**表６**「詞話本における“根前”“跟前”の使用頻度」に，今回調査したものを加えると，**表４**のようになる。

表４を見れば分かるように，使用頻度において“跟前”が“根前”を上回っ

表４　詞話本における“根前”“跟前”の使用頻度

	根前	跟前	計
1回 ～ 9回	0	3	3
10回 ～ 19回	12	2	14
20回 ～ 29回	22	1	23
30回 ～ 39回	7	8	15
40回 ～ 49回	10	2	12
50回 ～ 59回	9	6	15
70回 ～ 79回	15	15	30
80回 ～ 89回	9	5	14
90回 ～100回	13	5	18
計	97	47	144

ているのは，１～９回，30～39回だけであり，他は“根前”が“跟前”を上回っているか，もしくは同数という状況にある。これが“genqian”をめぐる萬暦年間の状況の反映だとはとうてい思えない。

また，詞話本30～39回，40～49回の“根前”が崇禎本でどのように書き換えられているかを確認すると，**表５**のようになった。

表５　“根前”をめぐる詞話本から崇禎本への書き換え

	（詞話本）	（崇禎本）		
	根前	ママ	跟前	削除
30～39回	7	4	3	0
40～49回	10	1	6	3
計	17	5	9	3

表５を見れば，萬暦から崇禎にかけ，着実に“根前”から“跟前”へ表記が統一されていく様子が見て取れる。

2.3　“li”について

前稿の**表８**「詞話本における“li”の使用頻度」に，今回調査したものを加えると，**表６**のようになる（p.17）。

表６から分かるように，“裡１”の頻度が圧倒的に高く，次点の“里”の

表６　詞話本における“li”の使用頻度

	裏	里	裡１	裡２
1回 ～ 9回	21	125	187	1
10回 ～ 19回	0	9	426	0
20回 ～ 29回	0	0	505	0
30回 ～ 39回	35	235	337	5
40回 ～ 49回	11	43	445	26
50回 ～ 59回	48	385	248	2
70回 ～ 79回	22	346	290	7
80回 ～ 89回	41	120	157	19
90回 ～100回	40	99	223	3
合　計	218	1362	2818	63

倍以上使われており，“裡１”が相当普及した段階を反映しているのであろう。また数こそ“裡１”にははるかに及ばないが，“裡２”も使われ始めており，“裡２”が使われ始めた時期の反映であろうと思われる。この“li”の使用頻度を，先に挙げた**表２**にあてはめても，全く同じ傾向のものは見当たらないが，“裡１”が普及し，“裡２”が使われ始めたことに注目すれば，嘉靖時期の状況の反映ではないかと思われる。

2.4 “ge”について

前稿の**表10**に今回調査した部分を加えて一覧表にすると，**表７**のようになる。

表７　詞話本における“ge”の使用頻度

	箇	个	個
1回 ～ 9回	2	0	376
10回 ～ 19回	115	0	385
20回 ～ 29回	0	0	438
30回 ～ 39回	23	1	508
40回 ～ 49回	11	0	434
50回 ～ 59回	13	6	553
70回 ～ 79回	1	124	600
80回 ～ 89回	30	11	293
90回 ～100回	181	2	269
合　計	376	144	3856

表７を見れば，一見して分かる通り，“個”の使用が圧倒的に多い[(11)]。この使用頻度がどういう時期のものかを判断するため，元末，明初，中期の“gè”使用状況を一覧にしたものを掲げると，**表８**のようになる[(12)]。“個”は『成化説唱詞話叢刊』，『古本董解元西廂記』などに若干見られるものの，それらを

表８　元末，明初，中期における“gè”の使用頻度

	箇	个	個
1 太平樂府（至正11年［1351］）	156	92	0
2 大誥武臣（洪武21年［1388］）	26	0	0
3 辰 鈞 月（永樂 2年［1404］）	52	0	0
4 義勇辭金（〃 14年［1416］）	16	0	0
5 降 獅 子（〃 14年［1416］）	11	0	0
6 蟠 桃 會（宣德 4年［1429］）	28	0	0
7 八仙慶壽（〃 7年［1432］）	22	0	0
8 常 椿 壽（〃 8年［1433］）	28	0	0
9 復 落 娼（〃 8年［1433］）	68	0	0
10 十 長 生（〃 9年［1434］）	13	0	0
11 神 仙 會（〃 10年［1435］）	40	0	0
12 嬌 紅 記（〃 10年［1435］）	70	73	0
13 薛 仁 貴（成化 7年［1471］）	1	38	0
14 石郎駙馬（〃 7年［1471］）	0	47	0
15 歪 烏 盆（〃 8年［1472］）	0	58	0
16 開 宗 義（〃 13年［1477］）	0	53	0
17 出 身 傳（〃 ？年［ ？ ］）	0	21	1
18 陳州糶米（〃 ？年［ ？ ］）	0	61	0
19 認 母 傳（〃 ？年［ ？ ］）	0	36	0
20 曹 國 舅（〃 ？年［ ？ ］）	5	88	8
21 張 文 貴（〃 ？年［ ？ ］）	0	41	0
22 白 虎 精（〃 ？年［ ？ ］）	0	13	0
23 看 燈 傳（〃 ？年［ ？ ］）	1	28	3
24 孫 文 儀（〃 ？年［ ？ ］）	2	35	0
25 孝 義 傳（〃 ？年［ ？ ］）	0	52	0
26 白 兔 記（〃 ？年［ ？ ］）	4	127	0
27 西 廂 記（弘治11年［1498］）	178	0	0
28 琵 琶 記（嘉靖27年［1548］）	29	213	0
29 寶 劍 記（〃 28年［1549］）	117	2	0
30 古董解元（〃 36年［1557］）	220	0	6
31 十 段 錦（〃 37年［1558］）	395	1	0
32 古名家本（萬曆17年［1589］）	244	353	81

もって“個”が普及したとはいえない状況であり，「普及」ということを考えれば，『古名家本』の萬暦あたりからと看做すのが適切であろう。

そのように考えれば，詞話において“個”が圧倒的に多く使われているというのは，詞話が成立した後伝写され，萬暦丁巳に出版されるまでに相当の手が加わった結果ではないかと考えられる。“個”の使用頻度が圧倒的に高いのは，そのためであろう。

［付記］

私事にわたることなので恐縮ではあるが，一言，書きとめておきたいことがある。小論で使った太平本は，畏友，故林博之君の旧蔵書である。林君は筆者が大阪市立大学大学院博士課程で学ぶようになって以来の友人だった。ただ筆者はここ十数年多忙を極めていたため，ほとんど連絡を取れずにいた。音信ないのが元気な証拠と思い込んで。ところが2007年９月，晴子夫人から，林博之君が2007年７月10日に亡くなったとの知らせを受けた。突然の友人の訃報にふれ，言葉を失った。もう，あの人懐っこい笑顔に会えないかと思うと居ても立ってもおれず，せめてお線香だけでもと思い，ともかく都合をつけ，ご自宅に伺った。無類の本好きだった林君だけに，ご自宅には所狭しとばかりに本が置かれていた。正に「本の山」という形容がぴったりの状態だった。そんな中に太平本もあった。今まで詞話本系統は大差ないと思いこんでいた筆者であったが，調べれば調べるほど，すべての影印本を見る必要を感じていたので，太平本を必要としている旨を晴子夫人に告げると，わざわざ筆者に送ってくださった。ここに記して夫人のご厚意に感謝の意を表したい。

林博之君のご冥福を心よりお祈りする。

注

（1） 佐藤晴彦「『金瓶梅詞話』をめぐって」『神戸外大論叢』第58巻，第３号

（2） 杨　鸿儒 2007，p.20，p.21

（3） 太田辰夫 1963，p.9

（4） 飯田吉郎 1963，p.6

（5） 18)の“艮”も，影印の技術により不鮮明に印刷されたため，“良”の“´”がかすれて見えなくなったと見なせば，18）の“艮”もA類に入る。

（6） 佐藤晴彦 2007，p.90

（7） 各テキストの版本は以下の通り。

太平樂府：四部叢刊本

大誥武臣：『皇明制書』上巻（1966年1月，古典小説研究会）

辰 鈎 月：周藩原刻本（中央研究院歴史語言研究所傅斯年圖書館本）

義勇辭金：〃（『全明雜劇４』臺灣鼎文書局，1979年影印本）

降 獅 子：〃 〃

八僊慶壽：〃（中央研究院歴史語言研究所傅斯年圖書館本）

常 椿 壽：〃 〃

十 長 生：〃 〃

神 仙 會：〃 〃

嬌 紅 記：『古本戲曲叢刊初集』

薛 仁 貴：『明成化説唱詞話叢刊』（臺灣鼎文書局，1979年影印本所収）

石郎駙馬：〃 〃

歪 烏 盆：〃 〃

朱子語類：『朱子語類』（臺灣正中書局，1973年影印本）

開 宗 義：『明成化説唱詞話叢刊』（臺灣鼎文書局，1979年影印本所収）

出 身 傳：〃 〃

陳州糶米：〃 〃

認 母 傳：〃 〃

斷曹國舅：〃 〃

張 文 貴：〃 〃

斷白虎精：〃 〃

看 燈 傳：〃 〃

孫 文 儀：〃 〃

孝 義 傳：〃 〃

白 兔 記：〃 〃

西 廂 記：『奇妙全相註釋西廂記』（臺灣世界書局，1976年影印本）

琵 琶 記：『新刊元本蔡伯喈琵琶記』（『全明傳奇』所収。但し，不鮮明な箇所は『古本戲曲叢刊初集』本で確認した）

寶 劍 記：『古本戲曲叢刊初集』

古董解元：『古本董解元西廂記』（中華書局，1963年影印本）

十 段 錦：『雜劇十段錦』（嘉靖戊午仲夏紹陶室刊）

16の『朱子語類』の数字を（ ）で括ったのは，『朱子語類』すべてを調査したわけではな

く，塩見邦彦1985に拠ったためである。29の『琵琶記』の“裡２”を「１(１)」としたのは，確実に“裡２”と認定できるのが一箇所，文字が不鮮明なため“裡２”と断定はできないが，“裡２”らしいと思えるのが一箇所という意味である。

(８)　数字と ab は，それぞれ詞話本の回数，葉数，表裏，行数を示す。

(９)　この内，２か所は“桌”の上が“十”となった“桌”という字になっているが，同じ字と認定した。

(10)　注(３)に同じ。

(11)　前稿，表10と頻度数に出入りがあるのは，今回，もう一度検討を加えた結果，数字上違いがあることに気づいたためである。前稿を訂正しておきたい。

(12)　使った版本は，注(７)に同じ。

文献目録

飯田吉郎　1963「大安本≪金瓶梅詞話≫の価値について　第五回と第五十二回のばあい」『大安』1963年５月号

太田辰夫　1963「金瓶梅詞話北京影印本の書き入れについて」『大安』1963年５月号

佐藤晴彦　2007「『金瓶梅詞話』をめぐって」『神戸外大論叢』第58巻，第３号

塩見邦彦　1985『朱子語類口語語彙索引』中文出版

杨　鸿儒　2007≪细述金瓶梅≫东方出版社